

黄金鳥

鈴木三重吉

青空文庫

貧乏な百姓ひやくしやうの夫婦がいました。二人は子どもがたくさんあって、苦しいところへ、また一人、男の子が生まれました。

けれども、そんなふうにかがひどく貧乏だものですから、人がいやがって、だれもその子の名附親なつけおやになつてくれるものがありませんでした。

夫婦はどうしたらいいかと、こまっています。すると、或朝あるあさ、一人のよぼよぼの乞食こじきのじいさんが、ものをもらいに来ました。夫婦は、かわいそうだと思つて、じぶんたちの食べるものを分けてやりました。

乞食のじいさんは、二人が、へんにしおしおしているのを見て、どうしたわけかと聞きました。二人は、生れた子どもの名附親になつてくれる人がないから困つてるところだと話しました。じいさんはそれを聞いて、

「では私わたしがなつて上げましょう。私だからと言って、さきでお悔くやみになるようなことは決してありません。」と親切に言つてくれました。夫婦は、もう乞食でも何でもかまわない

と思つて、一しよにお寺へいつてもらいました。

坊さんは、じいさんに子どもの名前を聞きました。じいさんは名前の相談をしておくのをすっかり忘れていました。

「そうそう。名前がまだきめてありません。ウイリイとつけましょう。」と、じいさんはでたらめにこう言いました。坊さんは帳面へ、そのまま「ウイリイ」とかきつけました。お百姓の夫婦は、いい名前をつけてもらったと言つてよろこんで、じいさんを家へつれて歸つて、出来るだけの御ちそうをこしらえて、名づけのお祝いをしました。

じいさんは別れるときに、ポケットから小さな、さびたかぎ鍵を一つ取り出して、

「これをウイリイさんが十四になるまで、しまつておいてお上げなさい。十四になったら、私がいいものをお祝いに上げます。それへこの鍵がちゃんとはまるのですから。」と言いました。じいさんはそれつきり二度と村へは来ませんでした。

ウイリイは丈夫に大きくなりました。それに大へんすなおな子で、ちつとも手がかかりませんでした。

ふた親は乞食のじいさんがおいていった鍵を、一こう大事にしないで、そこいらへ、ほり出しておきました。それをウイリイが玩おもちゃ具にして、しまいにどこかへなくして来ま

した。

ウイリイはだんだんに、力の強い大きな子になって、父親の畠仕事はたけを手伝いました。

或ときウイリイが、こやしを車につんでいきますと、その中から、まっ赤かにさびついた、小さな鍵が出て来ました。ウイリイはそれを母親に見せました。それは、先せんに乞食のじいさんがおいて行った鍵でした。母親はじいさんの言ったことを思い出して、はじめて、ウイリイに話をして聞かせました。それから、ウイリイはその鍵をいつもポケットにしまつて、大事に持つていました。

そのうちに、ウイリイの十四の誕たんじょう生しょうが来ました。ウイリイは、その朝早く起きて窓の外を見ますと、家の戸口うちぐちのまん前に、昨日きのうまでそんなものは何なんにもなかったのに、いつのまにか、きれいな小さな家いえが出来ていました。ふた親もおどろいて出て見ました。上から下まできれいな彫り飾いえりがついたりして、ウイリイたちのぼろぼろの家と比べると、小さいながら、まるで御殿のように立派な家でした。

ところが、その家には窓が一つもなく、ただ屋根の下、高いところに戸口がたった一つついているきりです。その戸口には錠じょうがかかっています。双親ふたおやは、どうしてこんな家がひよっこり建つたのだろうとふしぎでたまりませんでした。ウイリイは、

「これはきつといつかのおじいさんが私にくれた贈物にちがいない。」こう言つて、ポケットから例の鍵を出して、戸口の鍵かぎあな穴へはめて見ますと、ちょうどびつたり合つて、戸がすらりと開きました。

ウイリイはすぐに中へはいつて見ました。すると、その中には、きれいな、小さな灰色の馬が、おとなしく立っていました。ちゃんと立派な鞍くらや手綱たづながついていて、そのまま乗れるようになっていのです。そのそばの壁には、こしらえたばかりの立派な服が、うえし下たそろえて釘くぎにかけてありました。

ウイリイは、さつそく、その服を着て見ました。そうすると、まるで、じぶんの寸法を取つてこしらえたように、きつちり合いました。それから、馬に乗つて、あぶみへ両足をかけて見ますと、それもちゃんと、じぶんの脚あしの長さあしに合っています。

ウイリイは、そのまま世の中に出て、運だめしをして来たくなりました。それですぐに双親にそのことを話して、いさんで出ていきました。

ウイリイはどんどん馬を走らせていきました。するともうかなり遠くへ来たと思うときに、馬がふいに、口をきいて、

「ウイリイさん、お腹が減つたら私の右の耳の後へ手をおあてなさい。のどがかわいたら私の左の耳の後をおさわりなさい。」と、人間の通りの言葉でこう言いました。ウイリイはびつくりして、

「おや、お前は口がきけるのか。それは何より幸だ。」と喜びました。そればかりか、耳にさえさわれば食べるものや飲むものがすぐにどこからか出て来るというのですから、これほど便利なことはありません。

ウイリイは、馬を早めて、丘や谷をどんどん越して、しまいに大きな、涼しい森の中へはいりました。そして、馬の息を休めるために、ゆっくり歩きました。

そのうちにウイリイは、ふと、向うの方に何かきらきら光るものが落ちているのに目をとめました。それは金のような光のある、一まいの鳥の羽根でした。ウイリイは、めずらしい羽根だからひろつていこうと思つて、馬から下りようと思いました。すると馬が止めて、「いけません。ほうつておおきなさい。それをおひろいになると大へんなことがおこります。」と言いました。ウイリイはそのまま通り過ぎました。

ところが、しばらくいくと、同じような金色に光る羽根がまた一本おちています。こんどは前のよりも、もつときらきらした、きれいな羽根でした。

ウイリイは馬から下りて、ひろおうとしました。そうすると馬がまた、

「そつとしておおきなさい。それを拾うと、あとで後悔しなければなりませんよ。」と言いました。で、またそのままにして通りすぎましたが、しばらくするとまた一本、前の二つよりも、もつときれいなのが落ちていました。馬はやっぱり、

「およしなさい、およしなさい。」と言いました。

「私のいうことをお聞きなさい。悪いことは言いません。」

こう言つてしきりにとめましたが、ウイリイはほしくてくたまらないものですから、馬のいうことを聞かないで、とうとう飛び下りてひろいました。すると、その一本だけでなく、ついでに前のもみんなひろつていきたくなりました。ウイリイはわざわざあと後もどりをして、三本ともすつかりひろいました。

その羽根はほんとうに不思議な羽根でした。一本々々見ると、みんな同じように金色に光っているのですが、三本一しよにならべると、女の顔をか画いた一まいの画えになるのです。それこそ、この世界中じゅうで一ばん美しい女ではないかと思われような、何ともいえな

い、きれいな女の画姿えすがたです。ウイリイはびつくりして、その顔を見つめました。

ウイリイはやつと、その羽根をポケットにしまつて、また馬を走らせました。そしてどこまでもどんどんかけていきますと、しまいに或ある大きなお城の前へ来ました。馬は、

「これが王さまのお城です。ここへはいつて家来けらいにしておもらいなさい。」と言いました。ウイリイは、すぐに、王さまのうまやの頭かしらのところへいつて、

「どうか私を使つて下さいませんか。」とたのみました。

「ただ私の馬のかいばさえいただきませば、給料などは下さらなくともたくさんです。」と言いました。そして馬丁ばていにやつてもらいました。

ウイリイはうまや頭がしらからおそわつて、ていねいに王さまのお馬の世話をしました。じぶんの馬も大事にしました。そして、しばらくの間なにごともなく、暮していました。

ウイリイは厩うまやのそばに、部屋をもらつていました。夕方仕事がすみますと、ウイリイはその部屋へかえつて、いつも窓をびつしりしめて、例の三本の羽根をとり出しました。羽根は、お日さまのように、きらきら光るので、部屋の中が昼のように明るくなりました。

ウイリイは、その部屋の中の美しい女の人の顔を、毎晩紙へ画かき取りました。しかしなかなか思うように上手じょうずにかけなくて、たんびにいく枚もくかき直しました。

一たい厩の建物では、夜もけつして灯あかりをつけないように、きびしくさし止めてありました。それで、ウイリイはいつでも窓をかたくしめておくのでしたが、それでもしまいには、だれかが、そこに灯がついているのを見つけて、厩うまや頭がしらの役人に言いつけました。

厩頭は自身でたしかめにいきました。そうすると、ほんとうにウイリイの部屋から灯がもれていました。

ウイリイは、人が来たのを感じいて、急いで羽根をかくしました。それで厩頭がはいって来たときには、部屋の中はまつ暗になっていました。

厩頭は画かかけの画えを取り上げていきました。

翌あくる日、厩頭は王さまのところへ行つて、ウイリイのことを訴えました。どんな灯をつけるのかそれはわかりませんが、とにかくその灯でこんな画を画いておりましたと言つて、取つて来た画をお目にかかけました。王さまは、すぐにウイリイをお呼びになつて、

「これはどうした画か。」とお聞きになりました。

「私わたくしが画きましたのでございます。」とウイリイが申しました。王さまは重ねて、

「まだほかにもあるか。」とお聞きになりました。ウイリイは正直に、まだいくまいもございませんと言つて、ほかのみんな持つて来てお目にかかけました。

御覧になると、すべてで三十枚ありました。それがみんな同じ一人の女の顔を画いた画ばかりでした。その中で、一ばんしまいかいたのが一ばんよく出来ていました。王さまは、

「これは何から写したのか。お前は灯はともさないといい張るそうだが、暗がりくらで画がかけるのか。」とお聞きになりました。

ウイリイは仕方なしに、羽根のことをすっかりお話ししました。すると王さまは、その羽根を見せよと仰おつしやいました。

王さまはウイリイが言ったように、羽根を三枚ならべて、まん中に見える女の顔をごらんになると、びつくりなすつて、

「これはだれの顔か。」とお聞きになりました。ウイリイは自分でも知らないのですから、だれの顔だとも言うことが出来ませんでした。

そうすると王さまは、

「お前はわしに隠しだてをするのか。それではわしが話してやろう。これはこの世界中で一ばん美しい王女の顔だ。」とお言いになりました。

王さまは今ではよほど年を取ってお出いでになるのですが、まだこれまで一度も王妃おうひがお

ありになりませんでした。それには深いわけがありました。王さまは、お若いときに、よその国を攻めほろぼして王をお殺しになりました。その王には一人の王女がありました。王さまは、それを自分の王妃にしようとなさいました。そうすると、王女はこっそりどこかへ逃げてしまつて、それなり行く方がわからなくなりました。王さまは方々へ人を出してさんざんお探しになりましたが、とうとうしまいまで見附りませんでした。王さまはその王女でなくてはどうしてもおいやなので、それなり今日までだれもおもらいにならないのでした。

ところが、今ウイリイの羽根を見てびっくりなすつたのもそのはずで、羽根の中の画えは王さまが今まで一日もお忘れになることが出来なかつた、あの王女の顔がおでした。

王さまはそのことをウイリイにお話しになりました。そして、

「お前はこの画顔を持つているのだから、王女のいどころを知っているにちがいない。これからすぐに行つてつれて来い。」とお言い附けになりました。

ウイリイは、この羽根はただ森の中に落ちていたのを拾つたのですから、そういう王女がどこにお出いでだか、私は全まるでしらないのですと、ありのままを申し上げました。けれども王さまはお聞き入れにならないで、ぜひともつれて来い、それが出来ないなら、この場

でお前を斬きつてしまおうとお言いになりました。

ウイリイは、殺されるのがこわいものですから、仕方なしに、それでは探しにまいって見ましようとお返事をしました。

三

ウイリイは厩うまやへかえつて、自分の、灰色の小さい馬に、王さまがこんな無理なことをお言いになるが、どうしたらいいだろうと相談しました。

「それはあなたが一ばんはじめに拾った羽根のたたりです。私があれば止めたのに、お聞きにならないから。」と馬が言いました。

「第一、その王女はまだ生きておいでになるのだろうか。」

「御心配には及びません。私がかちゃんとよくして上げましょう。」と馬が言いました。

「王女は全く世界中で一ばん美しい人にそういありません。今でもちゃんと生きてお出いでになります。けれども世界の一番んはての遠いところにおいでになるのです。そこまできくには第一に大きな船がいります。それも、すっかりマホガニイの木でこしらえて、銅の

釘で打ちつけて、銅の板でくるんだ、丈夫な船でないと、とても向うまでいく間持ちません。」と馬は言いました。

ウイリイは王さまのところへ行つて、そういう船をこしらえていただくようにおたのみしました。

王さまは、さつそく役人たちに言いつけて、こしらえて下さいました。それにはずいぶん沢山の日数がかかりました。

ウイリイは馬のところへ行つて、船が出来たと知らせました。そうすると馬は、

「それでは王さまにお願いして、肉とパンとうじ虫を百樽ずつ用意しておもらいなさい。

そのほかにその樽を二つずつはこぶ車が百だい、その車を引っぱる革綱も二百本いります。それから水夫を二百人集めておもらいなさい。」と言いました。

ウイリイはそれをすっかりととのえてもらつて、船へつみこみました。二百人の水夫も乗りこみました。馬は、

「もうこれでいいから、しまいに大麦を一俵私に下さい。そしてこの手綱をゆるめておいて、すぐに船へお乗りなさい。」と言いました。

ウイリイは馬のいうとおりにして、船へ乗りました。そして今にも岸をはなれようとし

ていますと、馬は、ふいに白いむく犬になって、いきなり船へ飛び乗り、ウイリイの足もとへしやがみました。ウイリイはこれから長い間、海や岡をいくのにちようどいい友だちが出来たと思つて喜びました。

船は追手おいての風で浪なみの上をすらすらと走つて、間もなく大きな大海おおうみの真中まんなかへ出ました。そうすると、さつきのむく犬が、用意してある百樽のうじ虫をみんな魚におやりなさいと言いました。ウイリイはすぐに樽をあけて、うじ虫をすっかり海へ投げこみました。犬は、その空樽あきだるを鯨におやりなさいと言いました。ウイリイはそれも片はしからなげやりしました。

魚さかなたちは、思わぬ御馳走ごちそうをもらったので、大よろこびで、みんなで寄つて来て、おいしくい〜と言つて食べました。鯨もすっかり出て来て、樽を一つずつひろつて、それをまりにして、大よろこびで遊びました。

船は、それから、どん〜どん〜どこまでも走つて、しまいに世界のはての陸地へつききました。

ウイリイは船から上あがると、百だいの車へ、百樽の肉とパンとをつませて、二百本の革綱ぼんをつけてそれを二百人の水夫に、二人ずつで引かせて進んでいきました。

すると、向うの方で、大ぜいの狼おおかみと大ぜいの熊くまとが食べものに飢かつえて大げんかをしていました。みんなが牙きばをむき爪つめを立ててかみ合いかき合っているのです、ウイリイたちはそこをとることができませんでした。

ウイリイはそれを見て車から百樽の肉を下おろして投げてやりました。みんなは喜んですぐにはんかをやめてとおしてくれました。

それからまたどんどんいきますと、今度はおおぜいの大男が、これも食べものに飢かつえて、たつた一とかたまりのパンを奪い合つて、恐ろしい大げんかをしていました。ウイリイは気をきかせて、すぐに百樽のパンをやりました。大男たちは大そうよろこんで、ぺこぺこおじぎをしました。

「私たちはちようど百年の間けんかをしていたのです。おかげでやつと食べものが口にはいります。このお礼にはどんなことでもいたしますから、御用ごつしやがあたりでしたら仰おつしやつて下さい。」と言いました。

ウイリイはそこから水夫たちをみんな船へ帰して、今度は犬と二人きりで進んで、いきましました。

そうすると、ずっと向うの方に、きれいなお城がきらきらと日に光っていました。犬は、

「このへんでしばらく待っていらつしやい。あのお城のぐるりには毒蛇どくじゃと竜りゆうが一ぱいで、そばへ来るものをみんな殺してしまいます。しかし、その毒蛇も竜も、日にっ中ちゆう一ぱん暑いときに三時間だけ寝ますから、そのときをねらつて、こつそりとおりぬければ大丈夫です。」と言いました。ウイリイはそのとおりにして、犬と一しよに、無事に城の中へはいりました。

城の門も、中の方々の戸も、すっかり明け放してありました。

四

ウイリイは犬を外に待たせておいて、大きな部屋をいくつも通りぬけて、一ばん奥の部屋にはいりますと、そこに、金色をした鳥が一ぴき、すやすやと眠っていました。その鳥の羽根は、ウイリイが先せんにひろった羽根おんなと同じ羽根でした。ウイリイは、犬から教おそわっていたので、そつとその鳥のそばへ行つて、しっぽについている、一ばん長い羽根を引きぬきました。

鳥はびつくりして目をあけたと思うと、ふいに一人の美しい王女になりました。それが

羽根の画の王女でした。

「あなたは私の熊と狼のそばをよくとおりにぬけて来ましたね。」と王女が言いました。

「肉をどつさりやりましたら、とおしてくれました。」とウイリイは答えました。

「それでは私の大男のいるところは どうしてとおりにぬけたのです。」と王女は聞きました。

「パンをどつさりやりました。」

「毒蛇と竜の前は？」

「みんなが寝ているときにとおりました。」

「あなたは 一たい何のためにここへ来たのです。」

「じつは私の王さまが、ぜひあなたを王妃にしたいとおつしや

いりましたのです。どうか私と一しよにいらっして下さいまし。」とウイリイは言いま

した。王女は、

「それでは明日一しよに立ちましよう。しかし、とにかく、あちらへいって御飯をたべま

しよう。」と言いました。ウイリイは、王女の後について立派な大きな広間へとおりました。

そこには、ちゃんといろんな御ちそうのお皿がならんでいました。

ウイリイは犬からよく言われて来たので、一ばんはじめの一皿だけたべて、あとのお皿

へはちつとも手をつけませんでした。

御飯がすむと、王女は方々の部屋々々を見せてくれました。何を見てもみんな目がさめるような美しいものばかりでした。けれども、ふしぎなことには、これだけの大きなお城の中に、さつきまで鳥になっていたこの王女のほかには、だれひとり人がいませんでした。

王女は、しまいに立派な寢室へつれて行って、

「ここにある寢台ねだいのどれへなりとおやすみなさい。」と言いました。ウイリイはそれごとわつて、門のそばへいつて犬と一しよに寝ました。

あくる朝、ウイリイは王女のところへ行つて、

「どうぞ一しよにお立ち下さいまし。」とたのみました。王女は、

「いくにはいくけれど、それより先に、ちよつとこの絹糸のかせの中から、私わたくしを見つけ出してごらん下さい。」

こういつて、じきそばのテーブルの上に、色んな色の絹糸のかせがつんであるのを指ゆびさしたかと思うと、いきなり姿を消してしまいました。

ウイリイはちゃんと犬から教わっているの、ほかのかせより心こころもち持色の黒いのをより出し、ポケットからナイフを出して、そのかせを二つにたち切ろうとしました。そうす

ると、王女はあわてて姿をあらわして、

「それを切られると私の命がなくなりませう。よして下さい。」とたのみました。

王女は、それから、ウイリイをもう一度昨日きのうの広間へつれて行って、一しよに御馳走を食べました。ウイリイは犬から言われているとおりを守って、今度は一ばんしまいの皿だけしか食べませんでした。

王女は、しまいにまた昨日のように、寢室の寢台のどれかへおやすみなさいとすすめましたが、ウイリイは、やはりそれをことわって、犬と一しよに門のそばへ寝ました。

そのあくる朝、ウイリイは、

「今日きょうはどうか一しよに立つて下さいませう。」と王女に言いました。王女は、

「では、その前にこのわらの中から私をさがし出してごらん下さい。」と言って、一たばのわらの中へ体をかくしてしまいました。ウイリイはその中からほかのよりも少し軽いわらしびをより出してまたナイフで切るまねをしました。王女はびっくりして姿を現わして、
「そのわらを切られると私の命がなくなるのですから。」と言ってあやまり、

「それでは、もういきましよう。」と言いました。

王女は部屋々々の戸へ一つ一つひとつひとつ鍵かぎをかけて廻まわりました。それから一ばんしまいに、入口

の門へも錠前じょうまえを下おろしました。そして、それだけの鍵をみんな持って、ウイリイと一しよにお城を立ちました。

二人は長い長い道を歩いて、やっと海ばたへ着きました。船はすぐに帆を上げて、もと来た大海おおうみへ引きかえました。王女はその途中で、お城から持って来た鍵のたばを、人に知れないように、海の中へなげすてました。犬はそれを見て、こつそりとウイリイに話しました。

ウイリイはすぐに魚にたのんで、鍵をさがしてもらいました。魚たちは、いきがけにうじ虫をたくさんごちそうしてもらったものですから、そのお礼に、みんなで一しようけんめいに海の底をさがしました。

けれどもひろいひろい海ですから、なかなか見つかりませんでした。魚たちは血眼ちまなこになつて走りまわりました。そして、やっとしまいにのこぎり魚うおが鍵のたばを口にくわえて出て来ました。鍵は海の底の岩と岩との間へ落ちこんでいたのでした。のこぎり魚はそこへ無理やりに首を突つこんで引き出したものですから、すっかりあごをいためてしまいました。ですからその魚のあごは、今だに長短ながみじかになっています。

ウイリイはその鍵を受取つて、王女に知られないようにかくしておきました。

船は長い間かかってようようもとの港へ着きました。

王さまは王女をごらんになって、大へんにおよろこびになりました。王女は年も美しさも、そっくりもとのままでした。

王さまはすぐに王女と御婚礼をしようとなさいました。ところが王女は、自分のお城を王さまの御殿のそばへ持つて来てもらわなければいやだと言ひ張りました。王さまはウイリイをお呼びになつて、

「お前はなぜ、ついでにお城を持つてかえらなかつたのか。これから行つてすぐに持つて来い。それでないとお前の命を取つてしまふぞ。」

こう言つてお怒りおこになりました。ウイリイは困つてしまつて、うまやへ歸つて自分の小さな馬に言いました。

「あの大きなお城がどうしてここまで持つて来られよう。私はもういつそ殺してもらつた方がましだと思ふ。それに、あんな年取つた王さまが、あの若い美しい王女をお嫁にしようとなさるのだから、王女がおいたわしくてたまらない。殺されてしまえばそういうことも見ないですむから、ちようど幸さいわいだ。」

こう言つて、しよんぼりしていました。馬はそれを聞いて、

「これはあなたがあの二番目の羽根を拾ったばちです。しかし今度も私がよくして上げましょう。これからすぐに王さまのところへ行つて、この前のような船と、同じ人数にんずの水夫と、それからうじ虫と肉とパンと車と革かわづな綱なを、先せんのとおりに用意しておもらいなさい。」と言いました。

ウイリイはその仕度したくがすっかり出来ると、すぐに犬と一しよに船へ乗つて出ていきました。やはり前と同じように、魚たちはうじ虫をもらい、鯨は空あきだる樽たるをもらいました。それから狼おおかみと熊は肉を、大男たちは、パンをもらいました。ウイリイはその大男をつれて王女のお城へいきました。お城は日の光を受けてきらきら光っていました。

大男は、みんなでそのお城をかついで、ぞうさもなく海ばたまで持つて来ました。そうすると、そこへ鯨がみんなでて来て、それを背中へのせて、向うの港まではこんでいて、王さまの御殿のそばへおし上げました。王さまは、もうこれで御婚礼が出来ると思つてお喜びになりました。そうすると王女は、

「せつかくお城がまいました、部屋の戸がみんなしまっていますから何の役にも立ちません。その鍵は私がこちらへまいります途中でなくしてしまいました。あの部屋あが開あかないうちは御婚礼をするわけにはまいません。」

こう言つてことわりました。王さまは、

「それはどうさもないことだ。すぐに鍵をこしらえさせよう。」と言つて、急いで上手な鍛冶屋をおよびになりました。けれどもその鍛冶屋には、第一、お城の門の錠前にはまる鍵がどうしても作れませんでした。しまいには国中の鍛冶屋という鍛冶屋がみんな出て来ましたが、だれ一人その鍵をこしらえるものがありませんでした。

王さまは仕方がないので、また、ウイリイをお呼びになつて、

「あの門と部屋々々の戸を開けてくれ。すぐに開けないとお前の命はないぞ。」とお言ひになりました。

ウイリイは自分がちゃんとその鍵を持っているのですから、今度はちつとも困りませんでした。

五

王女は、門や部屋がすっかり開いたので、もう御婚礼をするかと思ひますと、また無理なことを言い出しました。

「ではついでもございますから命の水をひとびんと死の水をひとびんほしゅうございます。それを取りよせて下さりましたらもう御婚礼をいたします。これまでのことをみんな聞いていただきましたのですから、どうかこれもかなえていただきとうございます。」と言いました。

王さまはまたウイリイをお呼びになつて、命の水と死の水を持って来い、それが出来なければすぐに命を取つてしまふとお言いになりました。ウイリイは廐うまやへ行つて、

「私は今度こそはもういよいよ殺されるのだ。だれにくびをしめられるのか知らないが、もうそんなことはどうでもかまわない。」

こう言つて自分の馬にお別れをしました。馬は、

「それはあの三本目の羽根を拾つたあたりです。私があれほど止めてもお聞きにならないから、こんなことになったのです。しかしもう一度どうにかして上げますから、王さまに銀のびんを二つもらつてお出いでなさい。」と言いました。

ウイリイは銀のびんをもらつて来て、馬のさしずどおりに、一つへ命の水という字を彫らせ、もう一つへは、死の水という字を彫らせました。

「それでは早く鞍くらをおおきなさい。」と馬が言いました。ウイリイは間もなく馬に乗つて

大急ぎで出ていきました。そのとき窓のところ立って見ていた王女は、
「そのたすけ手がついていれば、きつと見附かります。」とウイリイに言いました。ウイ
リイは山や谷をいくつもく越して、しまいに、遠くの知らない国の、或^{ある}大きな森へ来ま
した。

馬はその森の中の大きな木の下へウイリイを下^{おろ}しました。その木の上には鳥^{からす}が巢^すをつく
っていました。馬はウイリイに、親^{おやがらす}鳥^すが立つて出るまで待っていて、その留守^{るす}に木へ
上^{のぼ}つて、巢^{のぼ}にいる子鳥を一ぴき殺して、命の水を入れるびんを、そつと巢^{のぼ}の中に入れてお
くように教えました。

ウイリイはそのとおりにしてびんを入れて下^おりて来て、じつと見ていました。そのうち
に親鳥がかえつて来ました。親鳥は子鳥が一ぴき死んでいるのを見ると、いきなりそこに
あるびんをくわえて、大急ぎでどこかへ飛んでいきました。それから、間もなくかえつて
来て、びんの中の水を死んだ子鳥の体へふりかけました。すると子鳥はすぐに生きかえり
ました。

ウイリイは急いで巢^{あが}へ上^{あが}つて、親鳥を追いのけて、びんを取って来ました。その中には、
まだ水が半分残っていました。馬はそのつぎにウイリイに、そう言つて、蛇^{へび}を一ぴきつか

まえて来させました。蛇は頭をなでてやればかみつきはしないから、それを死の水のびんと一しよに、鳥の巢の中へ入れておきなさいと言いました。ウイリイはびんと蛇を持って上つていきました。そうすると、親鳥が、またそのびんをくわえて、大急ぎでどこかへ飛んでいきました。

親鳥は間もなく帰つて来て、びんの水を蛇へふりかけました。蛇はすぐに死んでしまいました。ウイリイは急いで、木へ上つて、親鳥を追いのけて、びんを取つて来ました。今度のびんには、水がまだよつぽどたくさん残っていました。

ウイリイはその二つのびんをかかえて、馬を飛ばしてかえりました。

王女は、もう今度はどうしても御婚禮をしなければなりません。しかしその前に、二つの水がほんとうにきき目があるかどうか、ためして見ていただきたいと言いました。けれども、だれ一人殺されて見ようというものがないので、王さまは、またウイリイをお呼びになつて、これはお前が持つて来たのだから、きくかきかないか、お前がためして見るのがあたり前だと言いになりました。王女はすぐに死の水のびんを取つて、ウイリイの体へふりかけました。ウイリイは、たちまち死んでしまいました。王女は、つぎに命の水をその死骸へふりかけました。そうするとウイリイはすぐに生きかえつて、今までの

ウイリイとはちがつて、まぶしいほど美しい男になって起き上りました。王さまはそれをごらんになって、じぶんもそういうふうに着く美しくなりたいとお思いになり、

「では、わしも一度死んで生きかえりたい。」とお思いになりました。

王女は仰せを聞いて、さつそく、死の水を王さまにふりかけて、それから、命の水をかけて生きかえらせてお上げしました。王さまはよくばって、その上もつと美しくなりたいとお思いになり、もう一度死なしてくれとお思いになりました。

王女はまた死の水をふりかけました。ところが今度命の水をかけようと思いと、もう水がひとひずくもありませんでした。

「おやおや、これではもうどうすることも出来ません。」と王女は言いました。王さまは、とうとうそれなり、ほんとうの死骸になっておしまいになりました。

そうになると、だれかあとをつぐ人がいました。王女は、

「それは、ウイリイさんよりほかにはだれもありません。私を鳥からもとの人間にして、あんな遠い遠いところからつれてかえったり、あんな大きなお城をここまで持って来たり、命の水や死の水を取って来たりするようなことが、ほかのだれに出来ましょう。こんなえらい人が王さまにおなりなるのに何なんのふしぎもありません。」と言いました。ほかの人た

ちは、王女が手に持つているびんの中に、まだ死の水が残っているので、それにおそれ、だれ一人王女にさからうものもありませんでした。ですから、ウイリイはどうとう王さまになりました。世界中で一ばん美しい王女は、よろこんでウイリイの王妃になりました。その御婚礼の日に、ウイリイは、小さな灰色の馬のところへ行って、みんなお前のお蔭かげだと言つてよろこびました。馬は、

「それでは今度は私のおねがいを聞いて下さい。どうか剣をぬいて、私の首を切つて、それをしつぽのそばにおいて、三べんお祈りをして下さい。」とたのみました。ウイリイはびつくりして、

「お前を殺すなぞということが、どうして私に出来よう。」と言いました。

「でもそれが私の仕合せしあわせになるのです。けつして悪いことにはなりません。どうか私のいうとおりにして下さい。」と、馬はくりかえしてたのみました。ウイリイは仕方なしに、剣をぬいて、馬の首を切り落しました。そしてその首をしつぽのそばにおいて、三べんお祈りをしますと、今まで馬の死骸だと思つたのが、ふいに気高いけだか若い王子になりました。それは王女のお兄さまあにいでした。王子は今まで魔法にかかつて、永い間馬ながあいだになっていたのです。

二人は大よろこびをして、たがいに手を取って御殿へはいりました。王女のよろこびも、たとえようがないほどでした。

めでたい、御婚礼のお祝いは、にぎやかに二週間つづきました。ウイリイ王と、王妃とは、お兄さまの王子と三人で、いついつまでも楽しくくらししました。

青空文庫情報

底本：「鈴木三重吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年11月18日第1刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第一巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年

初出：「世界童話集 第一編『黄金鳥』」春陽堂

1917（大正6）年4月

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黄金鳥

鈴木三重吉

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>